



【H-TOA(はとあ)について】

2016年活動開始。東京を中心に活動している創作団体。

舞台上で物事が起こる重要性和観客がその場所から離れて物事を考えることをテーマに創作を始める。鑑賞者の行動や思考の状態に着目し、舞台上の現象と混ざり合い様々な思考へとむかう場の創出を特徴とする。

様々な対象および行為の境界線や物差しを別な角度から引き直したりそれ自体をなくしたりすることによって物事、現象のブレを前景化させる。現代思想系理論から着想を得、舞台芸術の代理、翻訳を中心とした初期作から、近作では演劇の時間芸術の側面に注目し、ベルトルトブレヒト「ガリレイの生涯」を主軸として作品を展開していくプロジェクトを開始した。ゆっくり作品を作ることをしようとしている。

俳優が演じる中華料理屋さんの店主の話を観客が塗り絵をしながら鑑賞する「ワンさんの一生とその一部」や観客が本を読みメモを取りながら、フィールドワークの要素も併せ持つ「これはペンです」などを発表。

ホームページ

<http://h-t-o-a.com>

<https://www.facebook.com/HTOAOFFICIAL/>



峰松智弘 | Tomohiro Minematsu

H-TOA代表。1991年兵庫県神戸市生まれ。早稲田大学社会科学部卒。

2016年創作団体H-TOAを結成する。旅行とビールが好き。

俳優として、第七劇場、sons wo:、(劇)ヤリナゲなどに出演。

【過去作品】

H-TOA 「ワンさんの一生とその一部」

TPAMショーケース参加

KYOTO EXPERIMENT 京都国際舞台芸術祭 オープンエントリー作品

城ヶ島公演2016年1月29日(金)浜辺

自由が丘公演2016年2月6日(土)-14日(日)gallery to plus 自由が丘

京都公演2016年3月5(土)-6(日)多次元ギャラリーキョロキョロ (学森舎内)

代官山公演2016年3月12日(土)-13日(日)代官山JMT Studio

不確定性原理、観察者効果をモチーフに舞台上の俳優、役、観客の存在についての考察をした。役者の演じる中華料理屋のワンさんの一生の語りを3部(舞台上で話されていることは事実ではない、舞台上で起こることは事実ではない、その空間、存在はあるのか)からなるシンポジウム形式でワンさんの語る物語や存在がなんども正され不確かさを得ていくような作品を目指した。

H-TOA 「ありえたかもしれない発表」

城ヶ島公演2016年10月4日(火)浜辺

東京公演2016年10月14日(金)-16日(日)gallery to plus 自由が丘

京都公演2016年10月22日(土)-23日(日)多次元ギャラリーキョロキョロ (学森舎内)

観測者効果、認識論について考察し記述すること、語り継ぐことをテーマに観客の存在が物語に影響を与え続けているという視点でSF的な物語を使って創作した。地球に潜伏していたニタス星人に観客は観測者として物語を進めるために惑星(会場)に連れてこられるという設定だが、個々の認識でしか世界は構成されないという展開になる。

H-TOA 『これはペンです』

TPAMフリッジ参加

原作 円城塔『これはペンです』 (新潮文庫刊『これはペンです』所収)

城ヶ島公演2017年2月5日(日) 浜辺

東京公演2017年2月8日(水)-13日(月)gallery to plus 自由が丘

渋谷公演2017年2月20日(月)渋谷アップリンク

post-truthについて考察し演劇における代替可能性や感情を扱うということをテーマに創作し、観客に原作を読みながら書き込みをして観てもらったり、上演中20分間のフィールドワークなどの要素をとりいれアウトプットと思考の場としての環境をつくり、それぞれ独自の鑑賞体験になるように仕掛けをつくりをした。

H-TOA 「Hi,i(lan)d」

Taipei Fringe Festival参加

台湾公演2017年8月26日(土)Woolloomooloo Xhibit

8月30日(水)31日(木)URS127玩藝工場

滞在の様子 <https://www.youtube.com/watch?v=qiRLerCjGoc>

この作品では台湾にどうしても距離がある日本人三人からの、台湾の印象、台湾と私、台湾への道中のテキストを3ヶ国語(英語、日本語、中国語)でコラボしました。距離や関係とは私たちが新たに形づけることとなります。しかし、形づけられたときにはもうすでに私たちの存在を構成するものは意味をなしてはいません。新しい唯物論の考察から私たちの身の回りのことから舞台上の存在の形付けまで展開させました。

【作品について】

作品の狙いは以下の2点で作品体験の中で多世界的感覚を抽出し思考や体験として再構築する、と思考の旅をする、である。

1点目について

多世界的感覚とは、様々な情報を同時並行して処理、または思考することができ、いつでもそこから離れられる状態である。と共に、情報や行動が目の前を超えて自分以外の世界に接続している状態である。

そこで私たちは作品を通して、思考をめぐることや思い出すこと、関連づけること、目の前のことから離れて複数のことを同時に考えること、手元の情報を参照することを見つめ直し、常に積極的にその行為を引き出せる状態にしたいと考えている。

2点目について

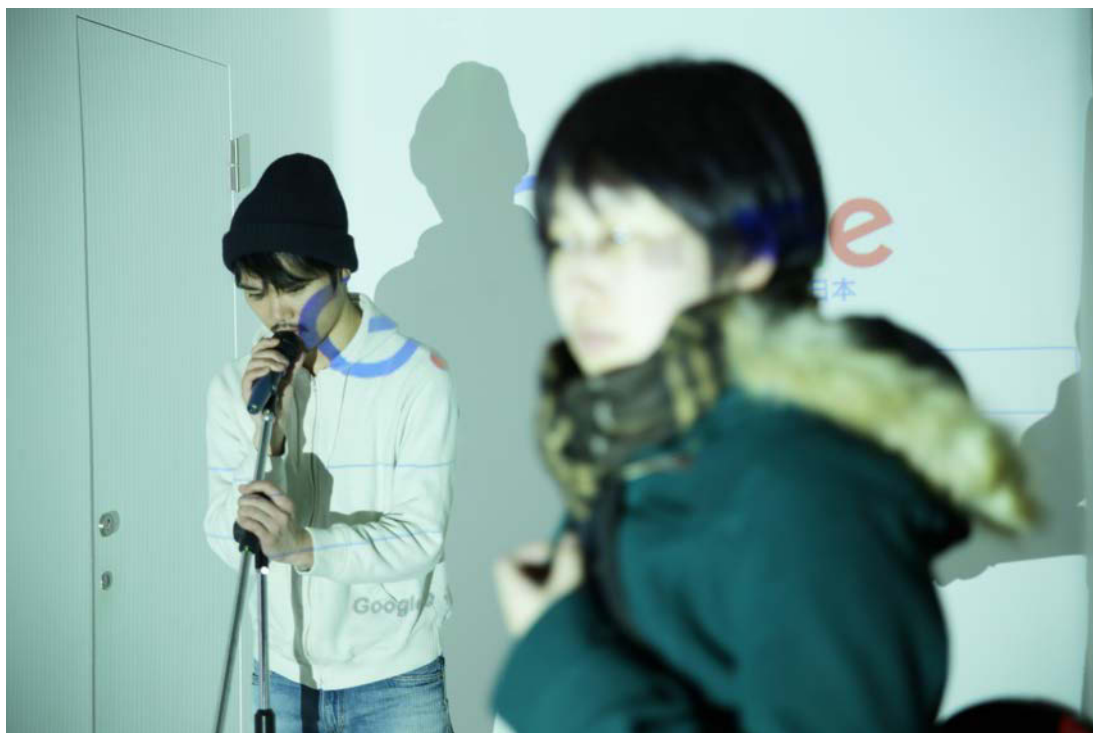
通常、演劇や映画をみたり美術館に行ったりした時には、じっくり考える時間や調べ物をしたりする時間はあまりない。なぜなら、目の前で何が起きているか、何があるかに躍起になってしまい、必死に解釈しようとするからである。特に前後にも何か予定がある場合、演劇や映画を見た時間、美術館に行った時間、と区切られてしまう。

一方旅では、目的地間の移動の際、目的地のことを調べたり、何か考え事をしたり、この道中と目的地を関連付けたりしている。旅では、何かを受け取る時ではなく、その前後の営みにより旅の体験の質が変わってくる。この旅体験と鑑賞体験を合わせることを思考の旅としている。旅には答えはない、何かを鑑賞した時に答えがないことがあるように個々人の思考の戯れを鑑賞体験としても良いのではと思う。この作品では、作品の前後や中間の思考にも介入することで、充実した思考の旅を試みる。

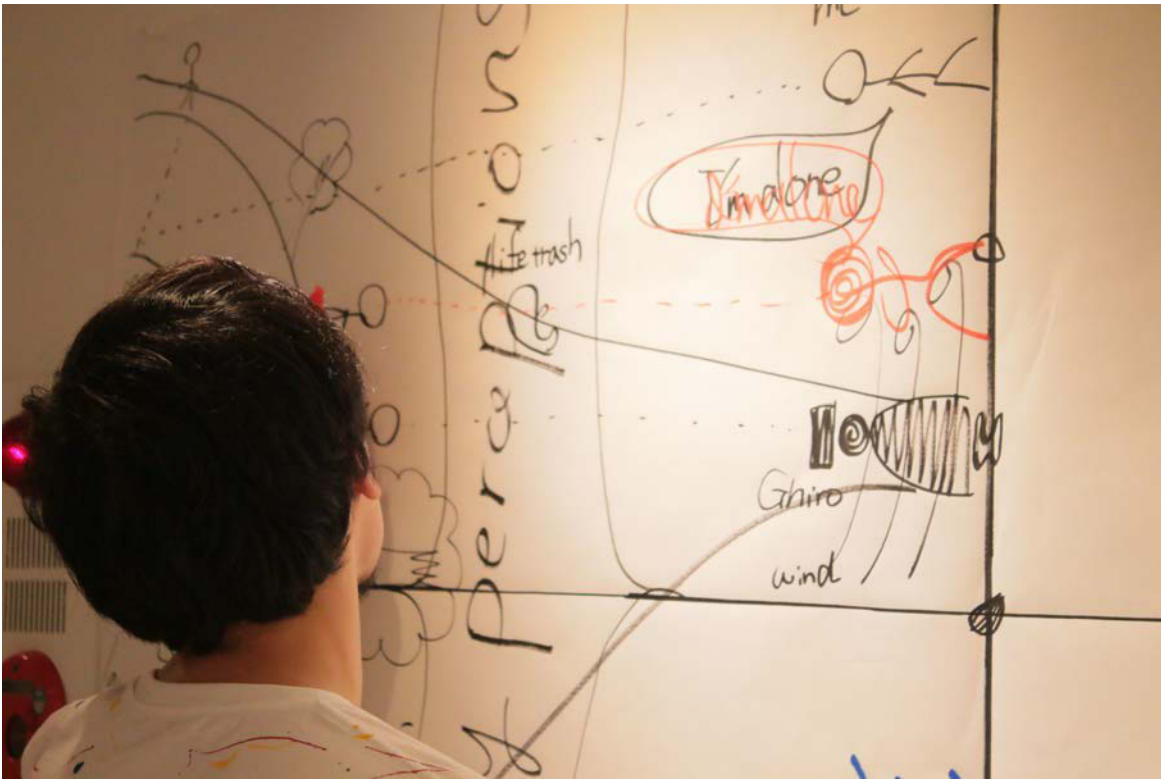
2017/6 峰松智弘

【舞台写真】

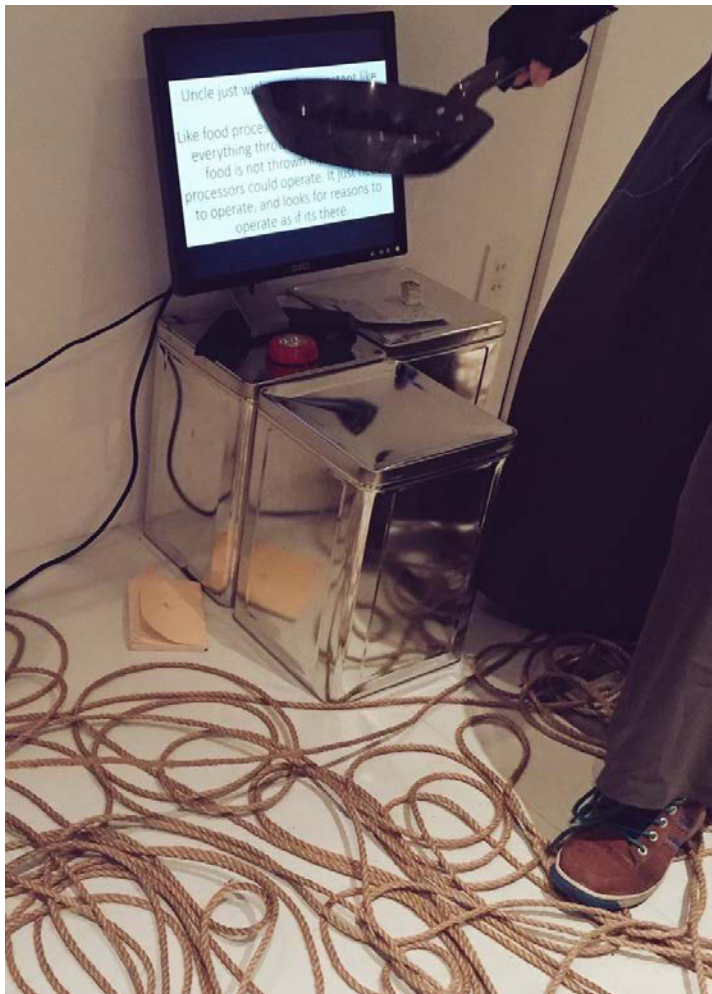
ワンさんの一生とその一部



ありえたかもしれない発表



これはペンです



【滞在制作】

2017年3月に峰松智弘個人活動として鳥取県ホスピテイルプロジェクトにてリサーチ活動を中心に滞在制作をおこなう。

以下報告書内容

ホスピテイルプロジェクトリサーチプログラム2017

峰松智弘

1,リサーチについて

私は人が訪れ、何かを感じ残していきそれが積み重なっていく場所や場所をどういう目線で見ることによる意識の違いに興味がありこれまでは作品発表場所をそういった場所として創作していました。

リサーチでは、鳥取市内の都市公園巡りと2009年にあった鳥取連続不審死事件の新聞記事の収集をします。公園では訪れた人の痕跡に着目し、新聞記事では場所に関する記述を集めたいと思います。

物事が起こった後と前では場所の見方や考え方が変わっていると思います。またそれが身近な場所やあまり馴染みのない場所であっても違うと思います。リサーチや発表を通して、そういった意識の移り変わりやそこへのまなざしに目を向けるきっかけになればいいなと思います。発表ではそれに加えて認識する媒体の違いによって物事の見方の変化にも着目し、参加者とお話しながらリサーチの共有を試みます。

内容

公園に行く→公園全体を眺める→人の形跡や積み重なって変化しているものに目を向ける、写真を撮る→使っている人を見る→そこから公園の雰囲気やどういう公園であったかをノートに書く→グーグルマップに公園の場所を登録する。

事件の新聞記事を集める→場所に関する記述を注目しつつ読む。

経過

公園と公園の間や移動間にドラマを感じる、なんども公園（目的地）の蓋を空け続ける。自分の体でめぐることによって場所と空気の比較ができそれが思考的ドラマを生んだ。

新聞記事は読んでいくうちに場所への記述より「」内の記述やそれが持つ影響に注目するようになっていった。

二つのリサーチの過程で場所という限定的な想像の余地を持つものではなく、空気や言葉や「」にされる意図や強調への多岐に渡るものに注目するようになる。

2,ワークショップについて

参加者と理想の公園を作るワークショップ「自分の公園を探す」

参加者と公園の思い出など話しつつ自身が公園をどういう場所としてみているかや公園の条件などあげていった。

その中からそれぞれ一つ公園の条件を選びその目線で一時間ほど周囲を歩いたのち、公園以外の場所ではどういった場所がその条件に当てはまるかを話した。

参加者の公園の条件を合わせて、それぞれが快適に過ごせる公園を作った。

3,発表について

旧横田医院を公園を見る目線で人の形跡や積み重なって変化しているものに注目しつつ、来場者と一緒に見て回る。その後に部屋に行き、私がグーグルマップのストリートビューで行った公園を再度巡る。壁には新聞記事の「」の部分の言葉が貼られている。発表はリサーチ資料の展示ではなくパフォーマンスという形にしました。それはリサーチで得られた情報が視覚的にわかりにくいことと、私自身の私体験と強く結びついていることによる。来場者と旧横田医院のツアーも含めて作品を体験する中で対話するということを重視して発表とした。



【現在進行中のプロジェクトについて】

H-TOA「ガリレイの生涯」(岩波文庫「ガリレイの生涯」訳岩淵達治)

原作:ベルトルト・ブレヒト

演出:峰松智弘

今までは舞台上や空間の役者、存在のレイヤーを重ねていくことによってブレのようなものを表現をしていたのですが、昨年の台湾公演を経て、加えて、「『私たち』は誰なのか」「今、何が起きているのか」、ということも同時に扱わなければならないと感じました。そうするためにもっと作品を様々な人や場所のレイヤーに触れさせてブレを増幅していく必要があると思いました。つまりこのレイヤーの厚みや見通しが私が思う、今演劇である、ことなのだと思います。

この作品は4月末に東京中目黒で上演し、台湾、京都を巡る予定です。それは場所の言葉や現象、要素をどんどん吸収した作品になると予想しています。それは抽象的なレベルではなく、実際に滞在制作に近い形でテキストや演出を書き加えるという試みをしたいと思います。ひとまず3年くらいは作品を形にし続けようかと思っています。

東京公演記録映像 <https://www.youtube.com/watch?v=bM6uxUb--OE>

私は遊べる、創作余地をもった作品を目指していく。作品の中でリレーショナルな行為(お話しする、なんか書く、作品と客さんが関わる)と作品の強度が保たれたもの、その行き来と溶け合いがなされている場を、ある意味、断絶と融解が混在しているような状態を作りたい。それが未来へと向き合える唯一の態度であると思う。言葉と行為の目撃で一瞬一瞬それは決まっていく。なぜならこれは演劇だからだ。(企画書作品についてから抜粋)

「ガリレイの生涯」全15場の1場1場が曲のように全体のアルバムを支えて、取り出し可能な、そして新曲をいくつか追加して、ライブにできるようなものになりたいと考えている。2018年に東京での上演を終えて、ひとまず1年はアルバムの形を保ちつつ、その外側にオリジナルの作品を包むように作っていかうかなと思い、制作を進めている。2018年8月の台湾版では東京上演版を15分ほどの短編で包み込む予定。

2018年6月10日リトルトーキョー「これはフリマですカフェ」にて章売りを実施。

2018/4/27-29 東京公演 MDP Gallery SPACE M

2018/6/10 「これはフリマですカフェ」リトルトーキョーにて章ごとに注文形式(集団:歩行訓練「返金屋」と同時企画)

2018/7/21 台湾版ショーイング 山吹ファクトリーにて

2018/8/5,7,8 台北公演 Taipei Fringe Festivalにて

2018/10/5-7 京都公演 GALLERY 35 KYOTO KAMANZA にて



「これはフリマですカフェ」にて章売り↑→



←4/27-29 東京公演にて